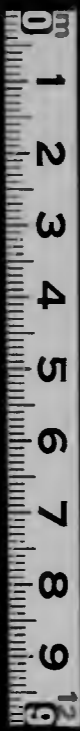
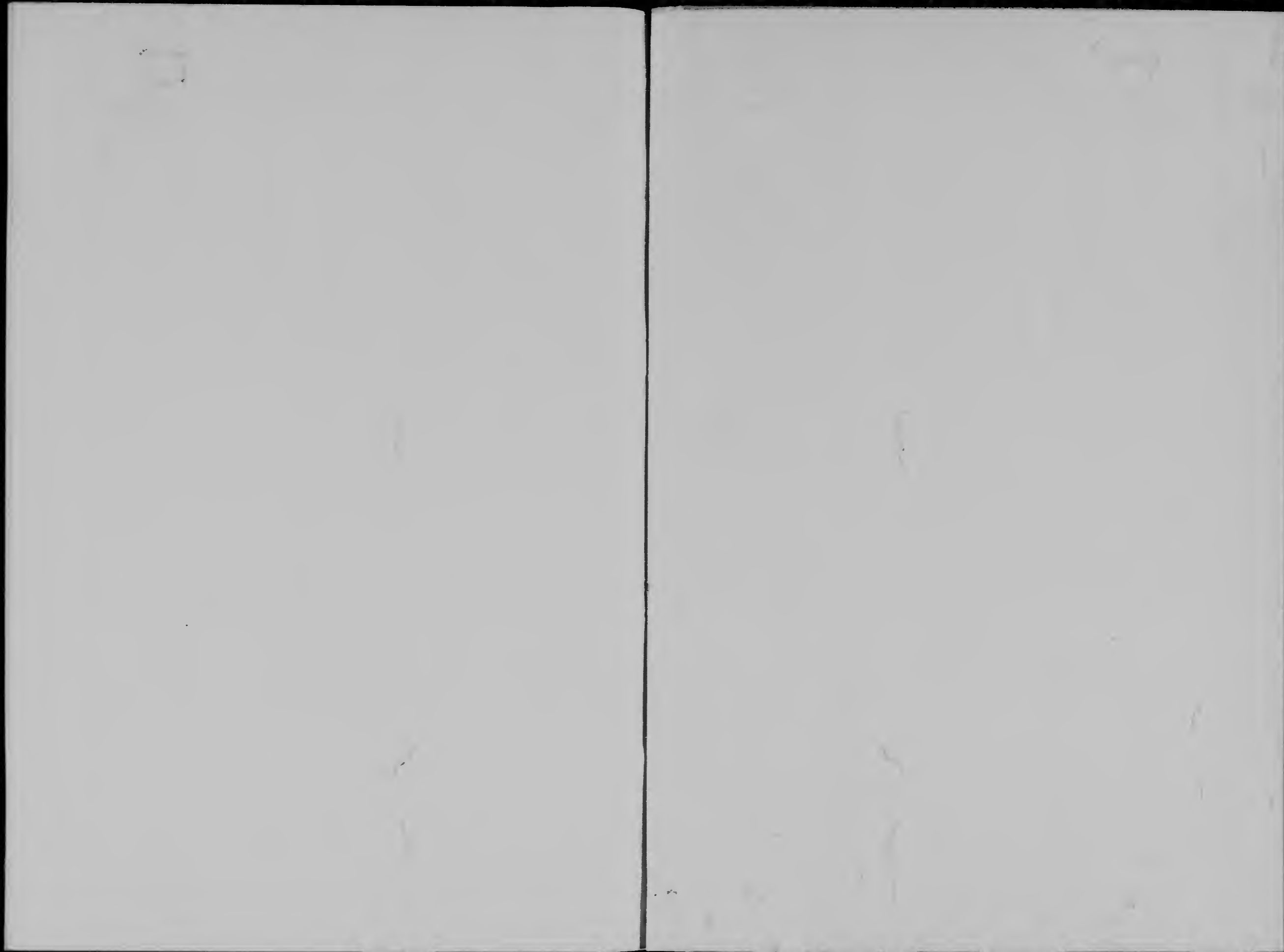


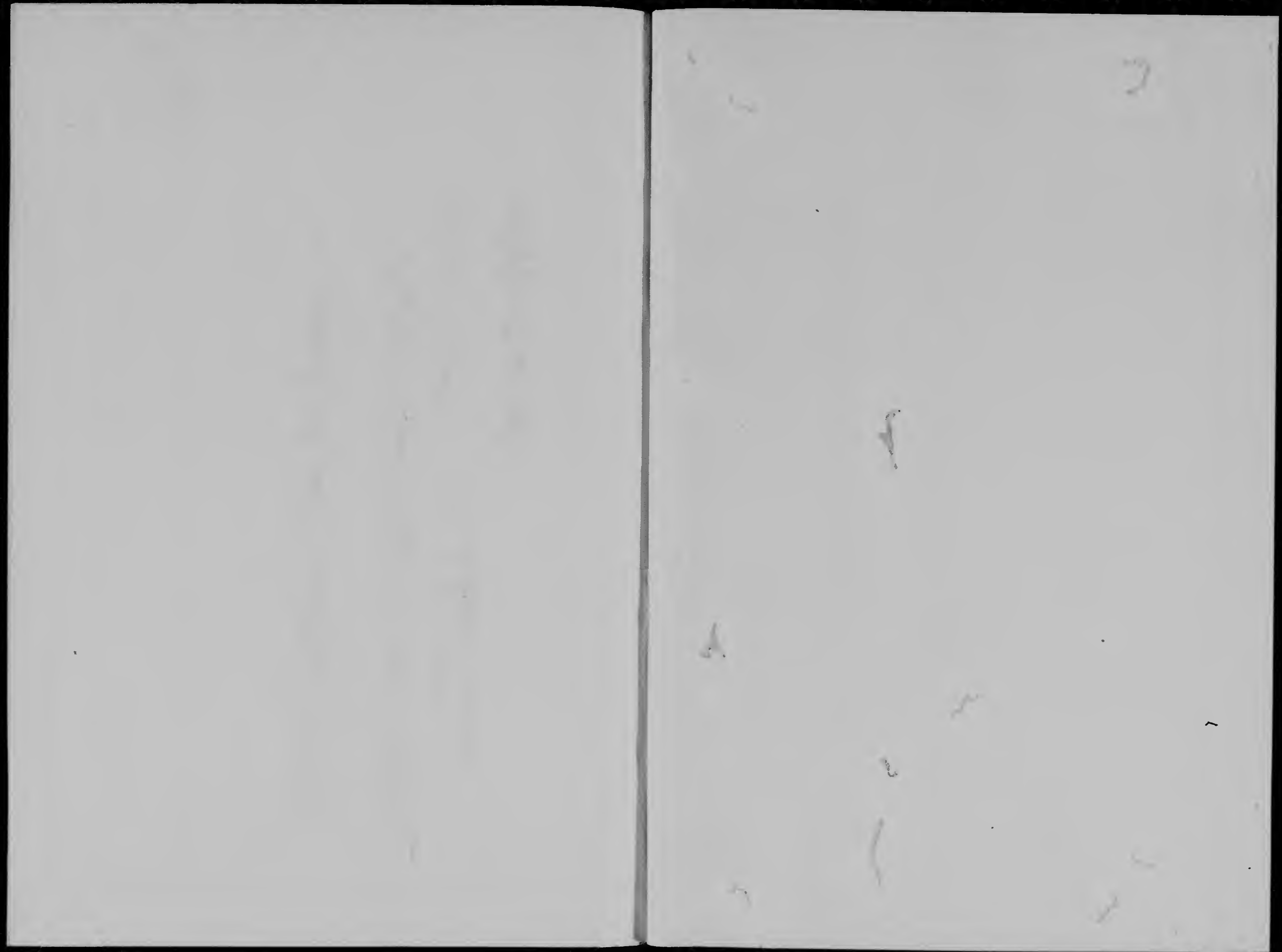
八番卷



内閣文庫	
番號	和 32569
冊數	394 (314)
函號	152 121

内閣文庫			
五三函一	三九二	三三五九	和
大架	冊	號	書
			類





天正十二年

天正十二年十二月

大井園徳子

甲州先方衆

大井園徳子 大井園徳子 大井園徳子

慶長十一年十月

天正十一年

大津藩水野市心組

武藏孫守

後基

大坂冬の陣の牧野内匠頭

別

寛永三十八年八月十日

寛永十二年六月廿二日

文禄元年

大津藩水戸組 幸田大内藏源次郎

幸田大内藏源次郎

同年二月廿二日

徳治伏見京大坂の若狭守

大坂西度所領不随

寛永九年二月廿二日

徳院殿の清くくみりて金

解せ給ふ

寛永九年

駿河殿に被為附

同年海へ一相別出に

寛永十戌年上級に高家

二百俵を給

寛永十戌年上級に高家

慶長乙子年

仁科義彦守信三男

大津藩水野市心領三萬石 此の源義信

國ヶ原義清也

信貞休庵の孫也

寛永二十二年七月廿二日

慶長六年

大津藩水野宗直 二儀 依指改市番の儀

依指甚之清右之助依
燒火之儀清書

後曰右年云々

同年伏見の警備云々

慶長十三年又の遺跡に云々

云々

慶長十八年伏見三年の遺跡

云々

慶長十九年又の遺跡に云々

伏見云々

元和元年年基大坂の保元平治
の争い大坂に随軍あり
首級を獲る

元和二年年基大坂の保元平治

平治元年大坂に保元平治あり

寛永九年年二月十日

徳院殿の清くみよ

金銀を給ふ

寛永十年年二月十日

大坂に保元平治あり

慶安元年年二月十日

荒井古形とあり
取付給ふ

養老二年年二月十日

遠州安智郡新庄村にあり

元子二百七十あり

明暦二年年二月十日

官舎死七十あり

古坂の鞍を荒井の結念寺に
送る

慶長十三年

大津書水野市心組 二重 幸四七三勝友治

後日石

千之後應年二百俵を給る

友治仗見京大坂の寄進を承

成

寛永九年二月廿五日

皇徳院殿の法うゝみ

金癖を給る

寛永十三年二月廿五日

二百石元正石
慶安元子年八月廿六日死

慶長十一年

大津藩水野忠清領二百石大井新造(政景)

後石正

其田元大井新造改を忠清

正石元正和二百石を後石

政景休隠の二年書ふ事

慶長十九宮年久々大坂の役も随分

元和三年年山(この時書ふ事)

元和九年年坂城の落城の時

寛永二宮年又大井新造改を其

のよりの事遺跡も石を後石新造

二百五十九年十一月廿二日

寛永六辰年

駿河殿被為附

日本駿河殿の書院書の紙の目録

後いすゝゝ

今迄寛永九年駿河殿に事あり

時物又當國後守の領しを又當

由書守の領し給之能可也申

松山に領し給之能可也申

寛永十二年十一月廿二日

寛永十五年十一月廿二日

寛永十六年十一月廿二日

慶長十二年

大津藩水野忠重守組之井里物易不題

大津藩水野忠重守組 大井長重 正永

後二百石

慶長十二年父之遺海二百石

寛永元年

駿河敏被高附

三石 駿河敏被高附 在之 後海

一 中別後父初山川村小藝居也

一 一 文 〇 〇 年 〇 〇 〇 〇

將軍家より十人の糧を給ふ
寛永十五寅年下道より上道別荘
古瀬村西別荘野村より二百石を
給ふ

万治二寅年十月七日死七十五歳

慶長十二年

細宗新九郎昌親二男

活書外之人

大津藩水節屋守組 二後 細宗八重昌澄

後二百俵
三百俵

二後二百俵を給ふ

昌澄伏見京大坂の寄進を承り

一奉度

大坂西度の役所ハ寄進を承り

細宗連りて承り

二後法如恩百俵元二百俵

寛永十酉年二月七日法如恩

二百俵元石百俵

慶安二箇年辭入酒井純守組

寛文元五年十月廿六日此書

慶長十二年

酒後長三郎昌吉惣取

大津藩井伊掃部助組二百俵酒後長三郎昌吉

後日石 後在在

二百俵元石百俵

昌吉侍身是京大坂の番頭

事

寛永十箇年二月七日

二百俵元石百俵

寛文元己年二月廿二日此書

慶長十四酉年

遠山早雲守堅親惣領

大津書去夜上城守組

大津書井住掃部助組 景遠山新次郎忠吉

同年伏見の三年番小糸了

慶長十六亥年十月廿七日死

慶長十四年

慶長七年海自

金田忠八市能勝也

市島知元

大津藩井伊掃部助組高弟金田惣八市能勝

後二百石

大坂の役。は休兵城の難攻
あり在り

元和元年十二月廿日死六十一歳

慶長十一年

慶長十一年被書

本家九代秀吉惣領

清書印之人

大津藩井伊掃部頭 三石本家九代秀吉

云々云々 先國之系乃後公云々云

上依國守村部山邊庄山山村云々

石を流るる

云々云々 三の二年書せ秀吉云々

云々云々

慶長十一年十月十日發付也死二字

慶長十六戌年

大津藩以来之信村惣氏

大津藩井伊掃部頭 定 以来八高信若

後二百俵 後千俵

元和元年より移り先

元和二年

園子代殿に被為附

氏名目一 寺方の小寺人氏

寛永十周年に被り進上り奉

皆川山城守細川

慶長十六年

慶長二年

久留米藩

清書外之入

大津藩井原掃部頭組

後之世

正吉伏見京大坂の道き清公年

事後

寛永九年

徳政殿の清くみく〜金

輝を給ふ

寛永十年

二百石

武州多摩郡のりふりふり

元正百石

寛永十八己未年十月二日於二条城御死

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

慶長十七子年

輔後守將忠輝卿附再上右衛門督昌綱参子

大津番井條掃部政親 百石石 西山長宗昌嗣

元和二辰年六月廿八日新大津番松平母後守親

慶長十八年

慶長二十年

石見強御所

市島

大津藩書林持部組

元和元年

内匠信成

獲子

年號月日

石見

七百

元和元年

清貞寺に………
只月交心海に

寛永九年二月廿六日

台徳院殿の清から………
二十五年七月

寛永十三年清貞寺五石九十二百果
………

正保二年十月廿七日

慶長十九寛年

牧野の清に志願

清書外之人

大清書井修持部祖 吾名牧野由清に懸

後七言心

大坂由清の清に井修持部祖に
………

正徳寺東京大坂の清に清に懸に

寛永十三年二月七日

元七百山中修持部祖に清に懸に

慶安二寛年八月廿二日清貞寺書に懸

養正三年二月十二日死

元和元年

慶長十三年被下出

大津藩牧野内田組

格

其目録

其目録

大津藩

元和元年

大津藩牧野内田組
格
其目録
其目録

大津藩

元和十三年被下出

一揆の起る一時を以て繪
合す

寛永二十二年六月廿四日死す

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

元和元年

大津書牧野内匠頭 過忠義之昌

過忠義之昌 過忠義之昌 過忠義之昌

後七百零二年余

同年八月遺詔六百零二年余

寛永九年二月廿六日

皇徳院殿の書わらみ

金輝を給す

寛永十周年二月七日皇徳院

二百零九年七月廿一日死

寛永十一年七月廿一日死

元和元年

大津藩牧野日正

内友生書

寛永元年

元和元年

慶長二十四年

本家

清書

大津書院野内

寛永元年

駿河殿附

寛永元年

元和元年

源氏物語の重なる

二別是助源人

大御書牧野日直記 二京源氏九代重なる

大坂夏の夜に随記

同年中に別是助源人

二石の地を尋ねる

重なる京大坂の重なる

慶安二年夏年中に大坂の死七十一

元和元年

大和書牧野内通以領二後 中務少輔

大和書牧野内通以領二後

後二日 後二日

大和書牧野内通以領二後

大和書牧野内通以領二後

大和書牧野内通以領二後

大和書牧野内通以領二後

大和書牧野内通以領二後

大和書牧野内通以領二後

大和書牧野内通以領二後

二百石常陸の國廣徳郡大船津村
礼井村よりわらわは元禄五年
寛永十八己未二月廿日死す年五十七

元和二年

大津藩牧野内匠頭 遠山小斎 景波

遠山小斎 景波 惣領

後七十五

元和二年 小斎 景波 惣領

景波 景波 惣領

景波 景波 惣領

景波

寛永十三年 二月廿日 景波 惣領

景波 景波 惣領

寛永十二年 九月廿七日 景波 惣領

景次、新恩の地二百石給りし
なりしに、其の地、豊田郡豊田
に在り、二百石の地なり。

元和二年

大津藩牧野内匠頭三郎朝宗の常侍昌春

回子付若手海野朝宗の常侍昌春

昌春の父昌行

回子付若手海野朝宗の常侍昌春

昌春の父昌行

昌春の父昌行

昌春

正保二年十月九日死

昌春の子太常寺卿某父也嗣て
万治元年十二月廿六日終つて
なりきるは家へつて二百俵を
收りし

元和二年

大津番收野内庄領二俵村上番庄改

村上番庄信信物願

後
七
百
俵

正治元年二百俵を給ふ

寛永二年正月源目三石庄の

二百俵の返一奉る

法政系大坂の御書付の事

存る

寛永九年二月廿六日

在徳院殿の法政系

金平由七郎

寛永十圓年二月七日並所恩
二百石上代の國山邊部小沼田村
長柄部と長村寺村部新井田村等
村武藏の國多摩郡三浦村と
りし是れ七石

正保に亥年 月 日 小菅信重

石治元子年九月廿日

小菅源院若二七圓の寺退福に
寺用と替りて寺の寺と
小神とと給る
石治二亥年九月二日 小菅源院

の所願を遂せらるる事と
とて其令に時彼二と給る

寛文六年年二月朔日死

元和六年

元和六年海目

渡邊孫三郎勝春子

古書永之人

大津書牧野内出祖吉宗后渡邊孫三郎富次

後九百六十二石

富次京大坂の富次、其の孫也、其の孫也、

寛永九年二月廿六日、其の孫也、

一々金五斗、其の孫也、

寛永十五年二月七日、其の孫也、

二百石上、其の孫也、

其の孫也、

大津書祖次

寛文六年大坂の幕府の御用金に
くまふたをばあゝ浪好侍様
二七五石

寛文二宮年九月十五日御書
同年十月廿七日御書
同日大坂御用金に御用金を
御の金の御用金に御用金を
黄金御用金を御用金を御用金に
御用金

寛文六年九月廿六日大坂御用金
御用金を御用金に御用金を御用金に
御用金を御用金に御用金を御用金に
御用金を御用金に御用金を御用金に

寛文八申年九月廿五日御書
御用金高圓の御用金御用金
御用金御用金に御用金を御用金に
御用金に御用金に御用金を御用金に
御用金に御用金に御用金を御用金に
御用金に御用金に御用金を御用金に
御用金に御用金に御用金を御用金に

寛文十二年二月廿五日御書
列守

延宝三年 月 日致仕を料
二百俵を給う

延宝五年十月十六日死す

元和六年

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

後三白山 政忠書

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

大治書院の内記 二條 八木忠三郎書

大治書院

元和七年二月七日

元七百

豊政京大坂の事
度

明暦二酉年二月七日於大坂城
死

豊政の事
道

元和七年

大津藩主豊政の事

大津藩主豊政の事

大津藩主豊政の事

大津藩主豊政の事

大津藩主豊政の事

明暦二酉年二月七日

元和八戌年七月

元和五年七月 日流目

松平定直志改惣領

清書命之人

大津藩牧野内匠頭九景松平七下席重徳

改孫直

集人

同年秋坂城の落清小島守の
定終年二月清令運送の事候
とてしるす。

寛保三年春二条城の宮裏

に

寛保九年七月廿日

台徳院殿に清くこみこみ

金部を給ふ

寛永九年二月廿八日清書組

寛永十周年二条城の御書

年

寛永十周年 内日誌

三上中州持也御角河原村

わきまを九の二

寛永十三年夏二条城

の御書

寛永十三年秋坂城の御書

の御書

寛永十八年夏二条城の御書

の御書

寛永十九年十月廿九日御書

同年十二月晦の御書

寛永二十年松平行波の御書

の御書

寛永二十年の御書

は比まの御書の御書

の御書の御書の御書

の御書の御書

正保二年地震の御書

日誌の御書の御書

慶安元子年二月日光寺書院
あふまの川へ清旅館捨方
なまのくまの事しむ書め
まの海にのりてのりて
年かたの神石の驛のりて
奉書書てのりて

慶安元子年二月十日坂中
拾河支那の撰うり地を
魚川支那の撰うり地を
子二日元子年

同年二月十日新恩の書
河別着に取上山坂中坂中村

山つりて

同年四月 日清帳抄

清如恩の巻の恩賜なり今年

のりてのりてのりて

同年十月 日清帳抄

洋福一徳年抄を敵り

同年十二月十日叙書作し
年入心と改免

慶安二五年二月 日清帳抄
松崎殿三州織を給り

慶安に卯年申に言ふ旅帳
有馬の温泉はかくを相ま

三つうらひ今捕系首せしめ
世傳より思海や文
寛文三年三月安ふふ

川

寛文三年六月十日
市役を免ふり身合ふ列す

寛文九年七月十九日致仕致す
利アケル

寛文十一年六月二日死す

元和八年

元和六年被逐

大津音牧野内匠頭 三郎 大田宗三 彦次郎 勝

後五石名

大田音高吉種惣次

市書外三人

次勝ハ世より大田の嫡流ナリ

父音高吉種トシテ嫡流ナリ

十八歳ニテ肺氣トシテ古州内務の歸

節居セシカハ吉種乃チ音高吉種

嫡流の家を嗣トシテ嫡流の嫡流

トシテ事ナクシテ

川内小元和六年

如左の如く
次勝元子年
寛永十三年二月七日
寛永十三年二月十八日
正保二年九月十八日

寛永元子年

寛永元子年

大清番牧野内匠頭

後

寛永十三年二月十七日
二百石

寛永十三年二月十八日
寛永十三年

寛永元子年

慶長十五年 源自

本多九郎玄直 忠順

清書 卯之入

大津藩牧野内膳 三石 幸之九郎玄心

後四石

後檢校

玄心 依見京大坂の御書清書 卯之入
事 度々

寛永十酉年二月七日 幸之九郎玄心

二百石 元四石

正保元年 申年二月十日 卯之入 幸之九郎玄心

寛永二五年

元和八年奉詔自

大津藩牧野内匠頭三右衛門 山本幸彦自勝

山本幸彦自勝

清書和之入

寛永八末年清書清免関門入

組

美濃二己年二月日免組大津藩

石川持隆等組一油書

寛永三十八年

大寺書牧野内匠頭三儀 其月源三郎

大寺書牧野内匠頭三儀 其月源三郎

其月源三郎 其月源三郎

寛永九年申年二月廿日

大徳院殿の清和の御

金銀を給ふ

其月源三郎 其月源三郎

寛永二十二年六月十日

其月源三郎 其月源三郎

寛永二十未年十月廿九日

寛永三寅年八月十日

大佛番牧野内匠頭 言石 小寺松十郎勝次

源目

山本又三郎勝重題
清書外之人

勝次京大坂の警備の事

寛永十七辰年秋坂城の警備の

病少く止まるる十月廿九日

馬引二宿の驛少く病少く

寛永十七辰年十月十二日於駿河府中驛
死

寛永九年

大田加藤内膳

清隆親大田加藤内膳

大田加藤内膳

後

政又

又

寛永九年二月廿六日

金五十五兩

寛永十年二月廿七日

金五十五兩

大田加藤内膳

寛永九年六月廿日死

寛永六年

寛永二年庚午海目

年麻甚云番古勝惣領

清書外之入

大津書好市心領言若年麻甚云物次

後呂卒石 後甚云之書

古次京大坂の寄書云々事

後云

寛永九年申年二月廿日

仁徳院殿の侍云々云々

金癖を後云

寛永十酉年二月廿日

二百山中徳の四番右部云々

正保二酉年二月廿七日
後醍醐天皇御事

寛永又辰年

大田藩領市川領 二京儀 川勝勘十郎正廣

大田藩領市川領 二京儀 廣知忠氏

政二部三書

二二后廣永二酉儀を後り

二廣永二京儀の爲に廣永二酉儀を後り

寛永九申年二月廿七日

二徳隠殿の御事

二二酉年二月廿七日

寛永十酉年二月廿七日

後醍醐天皇御事

采知の法書家を終り下野の國
うらもろいそりたる

明暦二る年九月 日大法書組既

万治二亥年 月 日二条城の高座

系きはきいしむ白浪好時殿を

終りしりし格恩賜なり

寛文二宮年秋坂城の法書いし

寛文二宮年夏二条城の高座いし

寛文八申年秋坂城の法書いし

寛文十一亥年夏二条城の高座いし

延宝二宮年秋坂城の法書いし

延宝五巳年夏二条城の法書いし

延宝八申年秋坂城の法書いし

天和二申年八月廿二日法書いし

二万俵九七百石

天和二亥年夏二条城の法書いし

貞享元子年八月廿二日法書いし

如好守記

同年十二月八日死七十二歳

寛永七年

寛永三年二月廿七日

徳川源三郎信貞題

清書外之人

大津藩御市心組 信貞

後古亭山 改源三郎

信忠京大坂の御書信に奉る事

後

寛永九年二月廿七日

徳院殿の書わらみ

金輝七郎

寛永十一年二月廿七日

徳川源三郎信貞

和名是元五百五十年石
美濃元辰年七月廿六日死年九

寛永六年

大津藩知事組 二層入橋之越前親重

後日石

女院高家母大橋新後之親次郎
之石高家母二百俵也
親重京大坂の御寄書に云く事
寛永十三年二月七日京に御書
是まきの二百俵を御知
武州安保村より送るに
慶安元子年大津藩組
之石高家母二百俵元六百石

二部なりぬ、遺跡を給つ寸
して和文の辞より人となる
寛文二宮年、神田の神館
よと出さるる、又連綿
中々

寛文八年

赤井首道の幸長惣次

源入

大津藩赤井組 寛文八年 赤井七郎幸長

後二宮年

幸長の父首道の幸長云々
慶長の子年、関ヶ原の役小
山道の持佐、小室系在の作
らるる、信州、抽回して討死
し、その子七郎幸長、幸長年
角、一宮、よと出さるる、大津藩
中々

寛永十三年新皇二百五十年上候
の四山遠郊のふちにてりりき
昔幸京大坂の御書小紙
慶安に卯年九月十九日死

寛永九年辛卯二月八日

青山屋書物屋主人
市川屋主人
青山屋主人
青山屋主人

寛永十六年三月十日
京大坂の御書小紙
寛永十六年三月十日
京大坂の御書小紙

寛永九年十一月十九日

大津藩邸市心組 書名 佐脇傳運の安雅

後七五石

寛永十三年二月七日迄付利息

二百石九七五石

安雅系大坂の安雅の事
後々

処宝元五年八月廿七日迄付利息
検分法用を命ぜらるる事
勢起るる事先

寛文九年五月十九日
御筆
黄令娘を給ふ
延宝元七年六月九日死

寛永九申年十月十九日

家督
清書所之人
大津書坊市心組
是石清の心書

寛政京大坂の
心保
正保二年七月廿七日
大坂城に死す

寛永九年申年六月十九日

寛永七年辛酉

丹波国

後發書(利重)物成
清書印之

大佛書坊市心組 言石 後發書(利重)

後發書

寛永十酉年二月七日

二百石元正石

利重書大坂行書(利重)物成

寛文八年己未十二月十六日

寛文八年申年二月廿九日

寛永十周年

元和元年海月

大津書場帝心組

後日石

同年十月

日蓮法皇二百石

元日石

寛永十六年九月十七日死

美濃守御所守重三男

持書印之人

二石 美濃守御所守重三男

寛永十酉年

大津番坊市心組 寛永市川去番坊

後四百二十九石

寛永十巳年八月廿七日

又造源に百二十九石

友次系大坂の御寄附

明暦元未年并入船垣若狹守組

元禄七年二月十六日死

寛永十一年

大津藩邸守組

三石郡新九郎昌行

新九郎昌行
元禄二年

昌行京大坂の寄書

辞入稿垣

長野守組

明暦元年九月廿二日

寛永十一年

横井安藤信忠願

元醫行殿元

大津番地市心組三音石横井市右衛門信利

信利京大坂の富屋（子）

寛永十九年十一月廿七日

寛永十一年

元和元年 渡河殿附

大津藩 市心組

言儀 長門守 長門守 信正

長門守 重信 田男

元 渡河殿 元

信正 長門守 渡河殿 属せ

られ 諸事 ありし 時 浪々

半 あり 世 こと 古 昔 あり 二 儀

と 後 あり 大 津 藩 に入 せ

寛永十二年 辞

寛永十二年 四月 見 此 書 也

寛永十一年

寛永十一年被_レ返_二百俵被_レ下

元_レ後河原_二元_レ渡_レ人

山_二岡_一部_二喜_レ守_一氏_二家_一

大_二津_一番_二堀_一市_二心_一組_二百_レ俵_一 山_二岡_一九_二市_一金_二心_一組

三_レ藏_一大_一 元_レ後河原_二元_レ渡_レ人

小_レ属_一大_一 元_レ後河原_二元_レ渡_レ人

一_レ々_一 元_レ後河原_二元_レ渡_レ人

元_レ後河原_二元_レ渡_レ人

寛永十七辰年八月十二日死

寛永十二年

寛永十二年 月 日 晴

若川甚左衛門重勝惣領

清書外之人

大津番場市心組

十番

若川甚左衛門重勝

寛之京大坂の番屋の事
後

寛宝十二年七月廿一日奉行

延享元年九月廿一日奉行

寛永十二年

寛永十二年 月 日 曾

多門平三郎信三郎

清書外之人

大津藩大久保右衛門尉信三郎

寛永十三年

寛永二十五年海目

大津藩大久保如定元祖三郎海遠三郎海成

海遠三郎海成其養子
清書印之人

改修書

石法元成
武京大坂の宮内少輔の如く
年七月十九日新清書大久保
市十郎組

寛永十二年十一月

大書之條如左元組 二條 忠 同 常 金 山 勝

大書之條如左元組の常金(山)勝

寛永十七年十一月 御書付

二條 忠 同

三勝 元 大 坂 の 御書 付 の 常 金 山 勝

寛永十七年十一月 御書付
後 家 の 料 目 一 一 九 八 八 送 渡
を 致 寸

延宝元五年二月廿六日法皇御書之段

天和二年二月廿一日法皇御書之段

百俵九二口俵

元禄二己年三月廿二日御書

御書之段

正徳元年二月廿二日御書之段

寛永十二年十一月廿七日

大津藩大津藩主赤松氏之御書

大津藩大津藩主赤松氏之御書

後三石 後七石

松本藩

寛永十三年十一月廿一日御書

百俵七口俵

正勝京大坂の御書

御書

寛永十八年 月 日御書

百俵九口俵

寛文七年十月十日大津藩組次

同年十二月廿六日大津藩組次
元禄百石

寛文八年 月日坂城の

時彼二を給りし可也

世恩賜なり

寛文十年 月日坂城の

時彼二を給りし可也

世恩賜なり

寛文十二年 月日坂城の

時彼二を給りし可也

世恩賜なり

延宝八年秋坂城の法清の
系也

天和二年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和三年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和四年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和五年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和六年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和七年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和八年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和九年十月廿二日坂城の
法清の系也

天和十年十月廿二日坂城の
法清の系也

寛永十巳丑年

大津藩大之孫右衛門左衛門全吉通高第二男

大津藩大之孫右衛門左衛門全吉通高第二男

大津藩大之孫右衛門左衛門全吉通高第二男

慶安元子年

徳松屋正被為附

同年月日一清方流法書院番付

同年月日一清方流法書院番付

寛文二寅年 雜林の山歩地取

壬辰神皇正統記の書持尚政の
身と表しての源之儀の事
寛永八年十月

源徳院君西城の事

山里の日記の事

天和二年十月 日蓮の事

十三年の松平徳政の事

貞享二年十月廿九日

寛永十三年

大徳書大徳の事

大徳書大徳の事 寛永十三年

後二百年 改七十年

寛永

寛永十八年十一月廿二日

源之儀の事

源之儀

万治二年十一月廿二日

源之儀の事

寛文元年二月廿二日

寛文元年二月廿二日二条城の
宿願の系を以て清順白根村
時後二を給ふとすよるし
此恩賜のり

寛文六年十一月廿三日清順
二百俵九七石

寛文八年秋坂城の清順
二百俵

寛文十一年夏二条城の清順
二百俵

延宝二年秋坂城の清順
二百俵

延宝六年夏二条城の清順
二百俵

延宝八年秋坂城の清順
天和二年八月廿二日
二百俵九七石

天和二年夏二条城の清順
二百俵

貞享二年夏二条城の清順
内省出御守紙
元禄元年十一月朔日
元禄七年

寛永十九年二月十日

大津藩組頭長井又左衛門吉次郎

大津藩之儀在東元組 二百俵 長井年之助吉勝

後子吉三郎

改七郎

右左衛門

寛永十九年二月十日原米二百俵

七郎吉三郎

吉勝之京大坂の儀在東元組 二百俵

後

寛永二十二年二月七日原米

二百俵 吉三郎又二百俵 吉三郎

寛文に辰年三月二日死年十二歳

寛永十六年

大清書大徳寺京宛組 寛 後二百年

後二百年

寛永十六年 月日又々

正石のりも二百年

信正文板の寄書

万治二子年 辞入本家

貞享二五年に月日死年六歳

寛永十六卯年

大津書之條石重組 二條 西山寺常行清昌殿

本番普作科障云重組長兼司前管者
後二百石
二百俵

壬辰年二百俵

昌順系大坂の御守衛云々

二條二年 丹 日蓮宗二百石

の二百俵

壬辰年二百俵

明暦二年 文二条坂の御守衛云々

明のり〜二月十九日卯時
〜く史実あるは二条城より御金
中色ハ掌領〜二月十日亥時
〜二月十日卯時〜の事いふ
〜二月十日卯時〜

万治二亥年二月二日死

寛永十七辰年

大侍番大侍藤原宗元組二辰 武友庄右衛門尉

武友庄右衛門尉二男
清基定方守右衛門尉安信方

寛永十九年正月十日意ハ
二辰 佐藤

安之京大坂の御高ハ
二辰 佐藤

三保江亥年十月十日御高ハ

寛文元世年十月十日御高ハ
二辰 佐藤

寛文元世年七月十日死ハ
二辰 佐藤

寛永十八年二月十日

寛永十八年 月 日 海部右大臣

左大臣 藤原 氏 氏 氏

大津守 藤原 氏 氏 氏

京兆守 藤原 氏 氏 氏

万治二子年十二月十五日死 享年九

寛永十八年二月十六日

寛永十二年九月十七日被旨

大侍書之條右京二再領
元禄の寛元
清書弟三人
右京 小林左近藤重勝

重勝をー免

台徳院殿より川へ七事あり後院殿

一属せらるる清書事なりて後院殿

二其後右殿よりもて四地は皆正に後院

世及大侍書小入らるる
後院殿より清書事なり
は右殿より清書事なり

は右殿より清書事なり
は右殿より清書事なり

重勝京大坂の宿屋より清書

正保二酉年十月廿九日於大坂城野中

重勝之教を大坂天満町の大徳寺に

送る

寛永十八己年二月十七日

大徳寺の住持右意電報長尾重勝改題

大徳寺の住持右意電報長尾重勝改題

後七百石

寛永二十未年十月廿八日二書

二百俵の給

改信宗大坂の宿願の事

後

明暦二酉年 月 日 海目七百石

是迄の二百俵の給

明暦二酉年十月十八日死

寛永十八年六月

大津藩主藤原宗直

後五百五十九

後五百五十九

後

寛永二十年六月十日

首領氏源

らん

なり

十二

を由せしむる事候も其秋御座候を
傳へし事候も曾祖又治帝御座候を信
う事候し一久之飛三申年御座候事
下討死せし事候も思はれ出され
祖又遠路中野の國のころも御座
候事候し御座候事候し

久保嘉経

老後京大板の御座候事候し
を由せしむる事候し

万治二子三年十月十日御座候事
同奉同日御座候事御座候事二百俵元
二百五十元

同奉同日御座候事御座候事
寛文二子三年二月十日御座候事
二百俵元

天和元酉年二月十日御座候事
天和二子三年二月十日御座候事
二百俵元
元禄元辰年二月十日御座候事
赤坂松入川八王子子人御座
年子人御座候事

元禄五申年十月十日御座候事
元禄五申年十月十日御座候事

元禄六年七月十日致仕全科
二百俵を給ふ

宝永六年九月十日死

寛永十九年年二月二日

寛永十九年年海月

故職年藏別久惣所
小菅様

大津藩大之條右衛門尉
後長海

法勝宗大板の御書懐ふとある事

なり

延宝己巳年二月三日法勝宗大板切子番次

延宝七未年二月二日徳中の國守官

法勝宗二百石九三石

同年 月 日法勝宗及出恩

の巻を恩賜なり

貞享二年正月廿三日
清仲官

元禄七年正月廿六日
死

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

寛永十九年六月十二日

大津藩主松平定信

大津藩主松平定信

大津藩主松平定信

大津藩主松平定信

大津藩主松平定信

寛文元年正月十一日
新法書之傳

寛永十九年

大清書之儀右系之免祖 二百十三年 寺本無三信安惣所

元徳正徳寺國跡寺元元

信物之祖又寺本屋張守信時

と云く代々早安の武田氏

一門とてかゝるは

武田とてのり

神祖ノ古由りてきりて其三信

信安とて其三信信物寺國跡

小く後所殿心仕りし事

のち武州八王子守小幡宗隆
十年の皇太子と号す武州
のち武州八王子守小幡宗隆
此の武州八王子守小幡宗隆

信託宗大坂の宮内省にあり

年号 月日不明 御入本宮内省にあり

御入本宮内省にあり

寛永十九年七月十二日

寛永十七年 丹 島自 小幡宗隆 御入本宮内省にあり

大徳書大徳書系御入本宮内省にあり

時宗系大坂の宮内省にあり
事 宗隆

貞享二年十月廿七日御入本宮内省にあり
事 宗隆

元禄二年二月廿日死

寛永十九年

二条清城清殿承二條七藏之旨
大寺番大之儀在京之也 二條儀 二條儀 二條儀

其後原承二條儀也

久重京大故の儀也
二條儀

延宝元年五月一日母大官死七十日

寛永二十九年四月十日

寛永二十九年三月廿日 旨 山崎町奉行 山崎昌徳
六百二十石之儀 二百七十石之儀 小普請

大佛番之儀 在 京之 屯組 三 十 番 山崎町奉行 山崎昌徳

勝長京大坂の旨 出 一 三 十 番

旨

寛文十年十月廿日 旨 山崎町奉行 山崎昌徳

此 宝 七 末 年 六 月 廿 五 日 旨 山崎町奉行

寛永二十六年六月廿二日

寛永十九年十一月十日被旨

大津藩青山因幡守組 三君 山崎重隆 信俊

山崎重隆 信俊 父子

元監 山崎

改 三君

信俊を以て先賢河原殿川之

所事を以てそのも海之

石飯より本城二百石を給り

所及大津藩に

信俊京大坂の番頭より

信俊

寛永二十六年八月廿七日

万治二亥年十二月廿一日
九百石

寛文九年正月一日

組

延宝己辰年十二月廿一日

寛永二十未年六月廿二日

大寺番科簿云云

大寺番科簿云云

後二百石

同年十二月廿一日

七〇〇石

慶安元子年六月廿一日

右京組

正保二酉年三月廿日

寛永十七年十月七日

青山徳十郎次物領

小菅景徳

大津藩青島園備守領 志保青山徳十郎次物領

後七左衛門

廣政京大坂の富屋より云々

存

延宝八申年二月廿九日大津藩領取

同年七月に日坂坂の徳富より

志保青山徳十郎次物領

是より云々しりしに仙恩賜り

天和二酉年に丹次云々並高直三左衛門

元子二百石

天和二年夏二月東城の兵亂に
 貞亨二年秋坂城の兵亂に
 元禄二年夏二月東城の兵亂に
 元禄六年秋坂城の兵亂に
 元禄八年夏二月東城の兵亂に
 元禄十五年二月大目黒の兵亂に
 同年十二月十八日布衣を免す
 元禄十八年七月二日常陸の
 國河内郡の兵亂に
 二百俵を没地となす
 元禄十九年九月十日清和にて

白根百平故しに於て

元禄十二年二月廿三日辭官
 小列寸
 同年六月廿九日死七十歳

正保二酉年二月七日

正保元申年十一月 日 跡目

本多松平君の玄孫

清康節之人

大津藩青心園備守 皇太后本多九代守重冬

重冬は京大坂の御書遣ひの御書遣ひ

寛文七年二月十日海軍傳藏

奉行しをいふ御書遣ひの御書遣ひ

貞享元子年八月十九日清康敷番之取

元禄元辰年二月十二日御書遣ひの御書遣ひ

御書遣ひ組

宝永二酉年十一月廿九日致仕

正徳二年十月十六日死

正保二年八月廿日

正保元年八月廿日海目

加茂清三郎正重書

正保元年八月廿日

大津藩青山園橋守親 二百歳加茂松九郎正貞

正貞京大坂の寄書正保元年八月廿日

年歸月日名知録入

寛文元世元年八月廿日死

慶安元子年二月八日

三保二年二月八日

小林右衛門重好

小普

大津藩書付因備守領 景石 小林中津重好

後大津藩

重好家系の書付にありしものなり
寛文十一年十月の因備海新田
清見の寺免回回所役部以長
中津野村の書付にありしものなり
付とありし書付にありしものなり
後大津藩の書付にありしものなり
寛文十一年十月の書付にありしものなり

延享元年九月十日元子法皇行

天和元年九月十九日宣旨

本朝の御事

を免すとのむ

正徳朝臣

内蔵元組

元禄以来年六月七日死

慶安二宮年九月二日

徳川家

大徳寺

大徳寺

延享二宮年

改尚京大坂

寛文十二年十一月十五日大徳寺組

延享三宮年

延享五宮年

延享七末年

延享七末年

天和二年二月廿七日



